

自己の多面性と心理的適応との関係に関する研究動向 : 分化と体制化の観点から

杜, 健
九州大学大学院人間環境学府

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/2339038>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 20, pp.13-22, 2019-03-15. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

自己の多面性と心理的適応との関係に関する研究動向 —— 分化と体制化の観点から ——

杜 健 九州大学大学院人間環境学府
加藤 和生 九州大学大学院人間環境学研究院

A review on the relationship between self-multiplicity and psychological adjustment: From the viewpoint of differentiation and organization

Jian Du (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Kazuo Kato (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Theoretical and empirical controversies on the relationships between self-multiplicity and psychological adjustment have continued since J. Block (1961). Empirical investigations, thereafter, have been attempted, resulting in inconsistent and therefore inconclusive findings. This paper attempted (1) to overview their theoretical arguments and backgrounds and (2) to review empirical studies that supported each side of the two camps, as well as those with no support. Based upon the above analyses, we concluded that most of those empirical studies focused only on the differentiation of self and failed to take into consideration the organization factor, and, therefore, argued that including the organization factor into equations would solve the inconsistency problems more comprehensively. Finally, we discussed new directions and agenda for future research.

Key Words: self-multiplicity, psychological adjustment, differentiation, organization, behavioral variability

人は、異なる相手や状況に応じて自分の行動を適切に変えようとする。これを「行動の変動性」(behavioral variability)と呼ぶ(例: Paulhus & Martin, 1988)。そして、自分の顕在的な行動の変容を自己観察すること(D. Bem, 1972)やこれらの行動に対する他人からのフィードバックを受け入れること(Cooley, 1902; Mead, 1934)で、多様な自己概念を形成する。これを「自己概念の多様性」¹⁾(self-concept variability)と呼ぶ(例: Churchら, 2012)。一方、これらの多様な自己概念は、記憶の中で同時に存在しており、ある時点や状況での刺激や手がかりによって活性化され、多様な行動を生み出す(Markus & Kunda, 1986; Markus & Wurf, 1987)。このように、「状況や相手に応じて、自己の表れの行動が変動し、そこから抽象される多様な自己概念が存在している」ことを「自己の多面性」²⁾(self-multiplicity)と本稿では呼ぶことにする(例: Suszek, 2007)。

自己の多面性と心理的適応との関係については、臨床心理学と人格・社会心理学の研究者の間で、数十年間で論争されており、実証的研究で得られた結果でも一貫していない。このようになぜ不一致が起こるのか、どちらの立場が正しいのかについては、現時点では未だ明らかになっていない。本論文は、自己概念の分化(各要素が相互に異なる程度)と体制化(各要素が相互に関連している程度)³⁾との2つの側面を同時に考慮することで、

この問題を解決しようとするものである。そこで、以下では、まずこの問題がどのように提起されてきたかについてレビューする。

1. 問題提起

James (1890)は、「自己」という論じた時に、既に「社会的自己」の多面性の現象について記述していた。さらにこの現象と適応性との関係についても、彼は社会的自己の多面性が「調和しない分裂」と「調和する分業」という2つの形があると述べている。その後、Cooley (1902)やMead (1934)のシンボリック相互作用論では、Jamesの観点を発展し、自己の多面性の形成過程における他者の役割を論じた。しかし、彼らやその後の人格・社会心理学者たちは、自己の多面性と心理的適応との関係について十分に議論してきていなかった。

一方、臨床心理学者は人間の心理的健康や精神疾患の治療の必要性から、多重人格(multiple personality)患者

¹⁾ 日本語論文では「自己概念の多面性」という訳語もある(例: 田島, 2010)。本稿では、self-multiplicity(自己の多面性)と区別するため、「自己概念の多様性」という用語を用いる。

²⁾ 本稿では、「自己」という言葉が行動と認知(自己概念)の両方の側面を含めて用いる。よって、「自己の多面性」は、「行動の変動性」と「自己概念の多様性」を含める。

³⁾ この2つの概念の定義については、後で詳細に述べる。

のヒステリーや人格分離の症状を気づき (Taylor & Martin, 1944), 自己の多面性や一貫性の研究を始めた。その中で, Lecky (1945) は, 初めて明確に自己の多面性と心理的適応との関係を問題にし, 「自己一貫性理論」(Self-Consistency Theory) を提出した。彼によれば, 人間は自己に対する評価の単一性 (unity) と一貫性 (consistency) を維持したいとする基本動機を持っている。そして, 不統一によって引き起こされた不調和や葛藤は, 様々な精神・情動の障害の根源となるとした。Lecky (1945) の先駆的な仕事は, 自己の多面性と心理的適応との関係を検討する研究の端緒となった。このように, 人格・社会心理学者と臨床心理学者は, 自己の多面性と心理的適応との関係について, これまで相対する立場に立ってきた。

そこで, 本稿では次の3つのことを行う。第1に, 自己の多面性と心理的適応性との関係についてのこれら2つの立場の論点を整理し再検討する。第2に, それぞれの論点を支持する実証研究の結果をレビューする。(3) 従来の論争や実証研究の不一致を包括的に理解する可能性を提案する。

2. 2つの立場の論点の整理

Donahue, Robins, Roberts, & John (1993) は, 自己の多面性と心理的適応との関係について, 人格・社会心理学者と臨床心理学者が対立する観点を持っていると述べていた。

まず, 人格・社会心理学者では (Gergen, 1968; Goffman, 1959; Leary, 1957), 自己が多面化しているほど状況に応じて行動を臨機応変に調整でき, そのことが心理的によりよい適応を生み出すと考えている。例えば, Leary (1957) によると, 状況に応じて多様な行動ができる人は, 幅広い対人行動レパートリーを持っており異なる状況や役割の必要に応じて柔軟に行動を変えられることができる。そのため, この傾向のより高い人は, 不安が低く自尊感情が高くなるので, 環境からのプレッシャーに適応するようになれる。Gergen (1968, 1972) の主張を援用するならば, 「健康で幸せな人は, より多くのマスクをかぶっている」(1972, p. 136)。逆に, 自分に対して常に一貫する行動を要求することは, 人格を凍らせてしまい, 変動する状況に適切に対応する潜在力を抑制するために, 適応をより困難にする。

以上をまとめると, 人格・社会心理学者は, 自己の多面性が認知・行動の柔軟性を引き起こすため, 心理的に適応的であると主張している。

一方, 臨床心理学者の立場では (Erikson, 1968; Horney, 1937; Lecky, 1945), 様々な状況の中で一貫性のある行動をとり, 安定した自己概念を持っている人ほど心理

的によりよく適応しているという。例えば, Rogers (1947) は, 自己に対する様々な知覚を意識的な自己概念として体制化している人ほど, 緊張感から解放され安心感を持ち自由を感じることを主張した (p. 364)。Horney (1937, 1942) によると, 人は様々な虚偽の仮面をかぶることによって, 多面的な自己を形成する。この過程では, 人は自分の本当に表出したいと思うものを抑えるために, あたかも自己がなくなってしまったかのようになる。したがって, 彼女は, 自己の多面性が「真の自己」の発達を妨害し, 神経症などの精神障害を引き起こすと主張した。また, Erikson (1950, 1968) によると, 自己の様々な側面に対して一貫性のある見方を持ち, 一貫したアイデンティティを形成することは, 人が自己に対して存在感や統一感, 連続感を持つ上で不可欠である。逆に, その形成に失敗した場合, アイデンティティの混乱や拡散が生じ, 自己の分裂や中核の喪失・拡散を生じると主張した。

以上をまとめると, 臨床心理学者は, 自己の多面性が認知・行動の一貫性を乱し, 葛藤や分裂を引き起こすため, 心理的に適応的ではないと主張している。

以上の対立する2つの論点のどちらが正しいのかを判断するために, それらを詳しく分析する必要がある。それらの論点は自己の多面性に伴い生じた2つの特徴(要因)を議論している。第1の特徴とは, 各状況・役割に対応した自己概念, 行動パターンが互いに異なっている程度(逆に, 似ている程度)である。以下, この特徴を相違性(要因)と呼ぶ。第2の特徴とは, 各々の状況・役割における異なった自己概念, 行動パターンが互いに関連し統合している程度(逆に, バラバラで統合していない程度)である。そこで, 以下, この特徴を関連性(要因)と呼ぶ。

そして, 人格・社会心理学者の論点は, より相違性(同じ vs. 違う)に焦点を当てているが, 臨床心理学者の方は関連性(調和に関連している vs. バラバラで分裂している)に焦点を当てている。この違いは, 2つの立場が相いれない主な原因の1つであるだろう。そのため, 相違性と関連性の区別は, この論争を解決する上で重要な点となる可能性がある。

そこで, 以下では, この2つの特徴を踏まえて, 2つの立場の論点のそれぞれを支持する実証研究をレビューしていく。

3. 2つの論点のそれぞれを支持する実証研究

以下では, 自己の多面性と心理的適応との関係について, 3つの結果を示す実証研究をそれぞれレビューする。それらが, (1) 正の相関を示すもの, (2) 負の相関を示すもの, (3) 無相関を示すものである。

3.1 正の相関を示す研究

Snyder (1974) は、行動の変動性について、自己呈示の社会的適切さへの関心や対人場面での手がかり（例えば、相手の反応や表情など）への敏感さ、場面に応じての自己呈示の制御・修正能力の個人差などに注目して、セルフ・モニタリング (Self-Monitoring, SM) という概念を提出した。Snyder によると、SM が高い人は、自らの行動の社会的適切さに関心を持ち、対人状況で人の行動に敏感となる。また、それらの手がかりに基づいて自己呈示を監視し制御する。その後、彼が開発した SM 尺度を利用した実証研究では、SM が低い人と比べ、高い人の方が次のような特徴があることを明らかにした。(1) 周りの人によって、社会的適切さを踏まえて、周囲の状況に応じて自分の行動と感情の表出を適切にコントロールし変えることができると見なされる。(2) 様々な感情をより正確に伝えることができる。(3) 積極的に状況の適切な手がかりとして社会的比較情報を探す。従って、SM の高い人は、柔軟に自分の行動を変えることで様々な状況の異なる要請に応じることができる (Snyder, 1979)。また、Lennox & Wolfe (1984) の研究では、SM が 2 因子からなること、また社会的不安は「自己呈示修正能力」とは負の相関 ($r = -.29$) があったが、「他者の表出行動への感受性」で無相関 ($r = .05$) であったことを見いだしている。このことから、SM の第 1 因子が高いほど、より適応的であると考えられる。

異なった観点から、S. Bem (1975) は、男性性または女性性のいずれだけを持つ人よりも、両性具有 (androgyny) の人のほうが男性らしさ・女性らしさの固定観念にとらわれないため、状況により合った適切な行動を行うことができると仮定した。そのため、より心理的に適応的となると考えた。それを検証するために、彼女は Bem 性役割目録 (Bem Sex Role Inventory, BSRI) を開発した。更に彼女は、両性具有の者が圧力下で男性性を示す独立さ (independence) をより表出していたが、子猫と一緒にいる状況では女性性を示す遊び好き (playfulness) を表出していたことを示した。このことから、S. Bem の考えが実証されたとした。

次に、自己概念の多様性について、Linville (1985, 1987) は自己複雑性 (Self-Complexity, SC) という概念を提案している。その基本仮説は、以下のとおりである。すなわち、自己は複数の自己側面 (self-aspect; 例: 役割, 対人関係, 活動, 目標など) から成り、更に各自己側面は複数の特性 (trait) から成っている。自己側面の数及び下位の特性がどれくらい重なっているかにおいては、個人差が存在する。また、自己側面は、様々な感情と繋がっている。人の体験される感情は、その時点で活性化される各々の自己側面に繋がっているポジティブ・ネガティブな感情の重み付けの相対的な平均値である。

そして、自己側面の数が多いほど、また、各自己側面における特性が相互に異なるほど、SC が高くなると仮定されている。そのため、SC の高い人は、ストレスに対する緩衝機能を持っている。すなわち、ネガティブでストレスの多い出来事が発生した時、SC の高い人は以下の 2 つの理由で情動が極端にネガティブにならない。第 1 に、各自己側面の間で重なる特性が少ないため、直接的に影響を受ける自己側面に対してのみ否定的な感情が引き起こされ、他の自己側面に波及しにくい。第 2 に、自己側面の数が多いため、1 つの自己側面で生じた否定的な感情は全体的な感情で占める比率は少ない。上述した仮説を検証したのが、次の研究である。Linville (1985) の研究では、成功 (または失敗) を経験した直後、カード分類課題で得られた SC 得点 (H 指標) が高い人と比べ、低い人はより激しいポジティブな (またはネガティブな) 感情を経験した。すなわち、SC が高い人は、低い人より、情動の安定性が高かった。そして、ネガティブな出来事が多い場合、SC の高い人は身体症状や抑うつ、ストレス感が少なかった (Linville, 1987)。これらの結果から、Linville は、自己複雑性の高いことが心理的にポジティブな影響を及ぼすと結論づけた。

以上の結果は、人格・社会心理学者の論点を支持するもので、自己の多面性が高いほど心理的適応が高いことを示すものである。

だが、臨床心理学者の論点を支持する実証研究もある。そこで、次に、このような研究を概観する。

3.2 負の相関を示す研究

行動の変動性について、Block (1961) は、Erikson (1950) の自我同一性の概念定義を分析し、個人が自分の内で体験する同一性と連続性を「役割変動性 (Role Variability, RV)」と命名した。これを操作的に定義するにあたり、次の方法を用いた。すなわち、被験者が他者 8 人 (例えば、同性友人) それぞれと一緒にいる時の特性 20 個の表出程度を主成分法で分析し、第 1 因子によって説明された変動の割合を RV の次元の指標とした。この指標が高いほど自己が知覚した複数の場面での対人行動間の一致度が高い (換言すると、RV が低い) ことを表す (p. 393)。次に、自己が知覚した行動の変動性と心理的適応との関係を検証するために、この指標と神経症傾向 (Psychoneuroticism) との相関を求めた。その結果、有意に負の相関関係 ($r = -.52$) が見られた。このことは、様々な場面で行動が一致していると感じる人ほど心理的適応が高いことを示唆している。

次に、Moskowitz & Zuroff (2004) は、人格の対人円環モデル (Inter-Personal Circumplex, IPC; Wiggins, 1979) に基づいて、3 つの行動の変動性指標 (Flux, Pulse, Spin) を提案した。これらの指標で評定値の高い人は、

自分の行動を大きく変えることになる想定されている。Erickson, Newman, & Pincus (2009) は、仮想と現実の対人状況での Flux, Spin 指標得点が高いほど、対人的悩みが高いことを示した。さらに、Côté, Moskowitz, & Zuroff (2012) は、以下の3つの結果を得ている。第1に、Spin 指標が高いほど、対人関係での遠い結びつきの比率が高かった。第2に、Spin 指標が高い人ほど、対人関係が相手によって悪いと評価された。第3に、関係が親しくなった場合、Spin 指標が高い人ほど、相手のネガティブな感情を引き起こし、そのため、相手から回避された。以上の一連の研究結果を考慮すると、対人行動が変動しやすい人ほど、より適応的ではないと考えられよう。

自己概念の多様性について、Altrocchi (1999) は「自己多元性」(Self-Pluralism, SP) という概念を提出している。具体的には次のように定義した。すなわち「状況や時間によって自己が多様 (diverse) であり、反応パターンにも変動があると感じている程度 (あるいは、状況や時間によることなく、自己が統一されており、反応パターンにも変動がないと感じている程度)」(p. 171) である。それを踏まえて、McReynolds, Altrocchi, & House (2000) は、SP 尺度を開発した。SP 尺度得点は、自尊感情 ($r = -.40$)、自我強度 ($r = -.40$)、一般的幸福感 ($r = -.44$) と負の相関関係があった。一方、特性的不安 ($r = .52$) や抑うつ ($r = .40$) とは正の相関関係があった。このことから、彼らは、自己多元性が高いほど心理的適応が低いと結論づけた。

また、Donahue, Robins, Roberts, & John (1993) は、前述した Block (1961) の研究を踏まえ、その問題意識を引き継ぎながらも、Block (1961) が曖昧にしていた RV の概念定義を「自己概念の変動性 (多様性) の程度」と明確に定義し、それを「自己概念分化」(Self-Concept Differentiation, SCD) と命名した。SCD は「自己概念が、その人にとって重要な役割の間で変動する (あるいは、一貫する) 程度 (p. 834)」である。これを踏まえて、彼らは主成分分析法 (Principal Component Analysis, PCA) の考えを用いて、SCD 指標 (以降 SCD_{PCA}) を開発した。そして、上の2つの立場の論点のどちらが正しいのかを検証するために、この指標と一連の心理的適応指標との相関関係を検証した。その結果、自尊感情と負の相関 ($r = -.39$) があったのに対して、抑うつとは正の相関 ($r = .44$) があった。すなわち、役割や状況間で自己概念が変動しやすい人ほど、心理的適応が低いことが示された。

3.1 と 3.2 でレビューしてきた実証研究は、人格・社会心理学者と臨床心理学者のいずれの論点を支持するものであった。しかし、2つの要因の間には相関がないことを示す研究もある。

3.3 無相関を示す研究

Baird, Le, & Lucas (2006) は、心理測定学的観点から、Donahue ら (1993) の SCD_{PCA} 指標には理論的に関係のない分散 (役割内項目間変動性) が含まれており、各項目の役割間平均値によって影響されるため、役割間変動性を正確に表すことはできず、妥当性を欠いていると主張した。Baird ら (2006) は、さらに役割間標準偏差に基づき、役割間平均値の影響を修正する SCD 指標 (以降 SCD_{CSD}) を開発した。この新しい指標は、様々な心理的適応指標と無相関であることが示された。このことから、彼らは、Donahue ら (1993) の研究で得られた負の相関関係は、何らかの交絡因子と心理的適応との強い相関から生じたものであり、これらの交絡因子を排除した場合、自己概念の多様性は心理的適応と関連しないと主張している。

4. 先行研究の問題点

上述したように、先行研究で得られた結果は一貫していない。すなわち、ある研究では自己の多面性が高いほど心理的適応が高いということが示唆され、他の研究では自己の多面性が高いほど心理的適応が低いということも示され、さらには2つの間には相関関係がないという報告もある。では、これらの結果の不一致はどのように引き起こされるのか。以下では、2つの観点から考察する。

4.1 問題点1：用いた測度の違い

これまでの実証研究で用いた方法が異なっている。測定法から分類すれば、今までレビューしてきた実証研究は、主に2つのタイプに分けられる (Baird ら, 2006; McReynolds ら, 2000; 安達, 2009)。

1つは、標準的な測度 (standard measures) であった。この方法では、被験者が様々な役割や社会的場面における自己概念や行動をイメージしながら、幾つかの特性について複数回評定することになる (例えば、「同性の友人と一緒にいる時に、自分はどうの人であると思うか。以下の20の人格特性語について自己評定する」)。その後、実験者は、複数の評定間の関係から自己の多面性の指標を計算する。この方法を用いた研究は、以下のとおりである: Flux, Pulse, Spin 研究 (Côté ら, 2012; Erickson ら, 2009; Moskowitz & Zuroff, 2004), RV 研究 (Block, 1961), SCD 研究 (Donahue ら, 1993), SC 研究 (Linville, 1985, 1987)。この方法は、行動や自己概念の表象の内容や構造を測定していると考えられる。

もう1つは、明示的測度 (explicit measures) であった。この方法では、被験者は作成された質問紙に回答し、自

分がどの程度変動すると感じるのかを自己評定する（例えば、「私は誰と一緒にいるかに関わらず、同じような人である」）。この方法を用いた研究は、以下のとおりである：SM研究（Snyder, 1974, 1979）、SP研究（McReynoldsら, 2000）。この方法は、行動や自己概念が変動している感覚を内省的に測定していると考えられる。

各々の研究が異なる測度を用いたため、測定したものが自己の多面性に関する異なった側面であった可能性があり、比較することができなくなる。

4.2 問題点2：考慮する特徴の不十分さ

これまでレビューしてきた実証研究では、相違性の特徴に主に焦点を当ててきた。すなわち、ほとんど役割や状況に固有の行動や自己概念がどのぐらい同じか（あるいは異なるか）の程度についてしか検討していなかった。この特徴は、人格・社会心理学では「分化」と呼ばれる（Donahueら, 1993；Linville, 1985）。しかし、分化した要素が階層性があるシステムのより高次レベルの概念によって関連づけられる程度（関連性）は、これらの先行研究の中では十分に考慮されていない。この特徴は、人格・社会心理学では「体制化（または統合⁴⁾）」と呼ばれてきた（Cheng & Cheung, 2005; Crockett, 1965; Tetlock, 1983; Woike, 1994; Woike & Aronoff, 1992; Wyer, 1964）。

自己の多面性と心理的適応との関係を検討する研究では、「体制化」の特徴を考慮したものは少ない。しかし、この特徴は2つの立場の論争を解決するキー・ポイントの1つである可能性がある。以下の2つの研究は、この可能性を示唆している。

Paulhus & Martin(1988)は、行動の変動性が様々な要因によって生じるものであるため、行動の変動性と心理的適応との関係を一律に論ずることができないと主張している。彼らは、行動の変動性には「機能的柔軟性 (functional flexibility)」と「状況性 (situationality)」(Goldberg, 1981)の2つの要因(次元)があると考えた。前者を「広範囲の対人的要請に応じて、自分の行動を調整する能力」と定義した。例えば、機能的柔軟性の高い人は、行動において高い変動性や多様性（「広範囲の対人反応」, wide range of interpersonal responses）を持っているだけでなく、状況に応じた反応を容易に取る能力（「人格能力」, personality capability）も持っているため、自発的な調整ができる。その結果、より適応的とも言えよう。また、後者を「自分の行動が状況によって決められると考える傾向」と定義し、多くの場合、状況によって強く規定されて (situationally compelled) 変動するた

め、心理的な不適応を引き起こすと考えた。彼らは、この予想を実証的に検討した。その結果、機能的柔軟性の高い人ほど自尊感情が高いのに対して、状況性の高い人ほど自尊感情が低かった。このことから、彼らは「行動の変動性だけからは、人が適応的かどうかは判断できない。この変動性が、機能的柔軟性によるのか状況性によるのかは、さらに検討する必要がある」(p.98)とした。

Harter & Monsour (1992)は、発達心理学の視点から、青少年の様々な他者（例えば、両親や友達など）と一緒にいる時の自己像について分析をしている。その研究では、青少年たちは特性形容詞を用いて異なった対象の前での様々な自己像を描くように求められた。その結果、年齢が上がるにつれて、異なる自己像を表現するために用いた形容詞が自己像間で重複する程度が減少していることが分かった。このことから、自己概念は加齢に伴い分化することが示唆された。一方、体験された葛藤 (conflict) の量（及びそれに引き起こされたネガティブな感情）は、青少年の前期（7年生）から中期（9年生）まで増加したが、その後、後期（11年生）にかけて減少していた。一般的には、分化が進むことで葛藤が増加すると予想されるが、必ずしもそうはなっておらず、葛藤が自己概念の分化によってのみ起こるとは言えない。

Harter & Monsour (1992)は、Fischer (1980)の理論を用いて、この現象を説明した。すなわち、青少年前期では、異なる自己像を比較するための抽象能力が十分に発達していない。そのため、体験する葛藤の量が最も少ない。中期になると、認知能力が発達することにより相互に一貫していない自己像を比較し統合するための抽象能力はまだできていない。そのため、感じられる葛藤が最も多くなる。後期では、抽象能力の発達に伴い異なる自己像をより一貫性のある観点から統合することができるため、体験された葛藤は減少すると考えた。以上の結果と理論から、ネガティブな感情を引き起こす自己像の葛藤は、分化だけから決定されるものではなく、抽象や統合するための認知能力の発達の程度によっても、大きく決定されると考えられる。そして、Harter & Monsour (1992)のインタビュー調査の結果は、この結論を支持していた。すなわち、様々な相手の前の自己像の間に異なっており、相反する特性を持っていることが必ずしも青少年たちに葛藤を生じさせていなかった。年上の青少年たちはより統合的な捉え方をするようになっていて、これらの特性間の不一致を受け入れることができた。例えば、友達の前で陽気に振る舞う自己像と親の前で憂うつそうにしている自己像を、自分が気分屋さんだという高次の捉え方をすることで、より統合することができる。その結果、葛藤を感じなかったと考えられる。

この2つの研究は、分化のみから自己の多面性と心理的適応との関係を決定するのではなく、体制化について

⁴⁾ 以下、体制化 (organization) と統合 (integration) は同じ意味で用いる。

も考慮すべきことを示唆した。機能的柔軟性研究 (Paulhus & Martin, 1988) では、一見同じように行動が変動している人も、変動性の生じる要因によって心理的適応の程度が異なることが示された。また、Harter & Monsour (1992) の自己像研究では、葛藤体験の程度は、自己概念の分化度と体制化度の両方によって規定されていた。

また、この2つの研究それぞれ欠けているところがある。Paulhus & Martin (1988) の研究では、明確に分化と体制化の特徴を分けて測定していない。Harter & Monsour (1992) の研究では、インタビュー調査によって青少年たちの自己概念を体制化する傾向について調べているが、その程度を量的に測定していない。

以上の考察をまとめると、実証研究での結果が一貫していない理由は、次の2つである。(1) それぞれの研究が測定しているものが異なっていた (言い換えると、異なる測度も用いた)。(2) 「体制化」の特徴を十分に考慮してこなかった。そのため、以前の実証研究で得られた不一致の結果を包括的に理解するために、先行研究と同じ測度を用いて「分化」と「体制化」の特徴 (要因) のそれぞれを測定し、それらと心理的適応との関係を検討する必要がある。

5. 自己の「分化」・「体制化」と心理的適応との関係

心理的な不適応を引き起こす葛藤は、行動や自己概念が記憶の中でどのように表象されるのかによって規定される (McConnell, 2011; McConnell & Brown, 2010)。しかし、異なる場面や役割での行動や自己概念の不一致 (分化) は、必ずしも葛藤感を引き起こさない (Gergen, 1968)。逆に、複数のアイデンティティが良く統合 (体制化) されている場合には、人がより柔軟に対人要求に応じることができる (Thoits, 1983)。

具体的に、以下の仮説が想定できよう。すなわち、自己の分化と体制化の両方が高い人は、柔軟性を持ち、異なる状況の要請に応じることができる。その同時に、多様な行動や複数の自己側面の葛藤を解消できるので、より一貫性や統一性を感じるため、心理的適応が高いと考えられる。逆に、自己の分化度は高いが体制化度が低い人では、行動パターンや自己概念は多様になるために、より多くの葛藤と不確実性が生じやすい。そのため心理的適応が低くなると考えられる。

分化と体制化の関係については、何人かの研究者 (Allport, 1937; Harvey & Schroder, 1963; Power, 2007) は以下のような主張がある。

「分化・未体制化」状態とは、複数の演奏者が1つの曲の異なったパートを同時に演奏する時に、他の人の演奏を聞かずに、自分のペースで勝手に演奏するようなものである。その結果、調和した演奏にならなくなる。曲

の各部分が葛藤し、混乱し無秩序的なものとなる。それに対して、「分化・体制化」状態とは、交響楽団の演奏する中で、互いに調和しながら演奏するようなものである。その結果、曲が有機的な1つのまとまりを作る。したがって、体制化は、分化する各要素を絡み合わせ、調和をとる役割を果たすと考えられる。言い換えると、体制化は、複数の要素を、バラバラで無秩序な状態から規則的で構造化された状態へとまとめあげることにより、システムの機能を上げることができる。

これまで述べてきたように、自己の「体制化」の高低によって、「分化」と心理的適応との関係の方向が異なる可能性はある (Harter & Monsour, 1992; Allport, 1937)。この仮説を検証するためには、まず体制化を操作的に定義し測定する必要があるだろう。

6. 自己の体制化と行為同定理論

では、どのように自己の体制化の程度を操作的に定義するのか。上述のように、体制化できる人は、高次レベルで個々の物事や行為を関連づけより大きなまとまり (チャンク) として抽象的に考える傾向があるだろう。逆に、体制化できない人は、低次レベルで物事の個々の小さな事象や行為をバラバラに捉え、より小さなブロックとして具体的に考える傾向があるだろう。こうした思考の体制化傾向を行動知覚の側面で理論化したのが、行為同定理論 (Action Identification Theory, AIT; Vallacher & Wegner, 1987) である。

AITによると、人の行為をどのような単位で同定するかには異なった水準が存在するとしている。すなわち、人は自分にとって遂行困難度の高い行為は、低次レベルで同定する傾向が高い。その場合、具体的な内容や手段の側面から個々の行為を識別する。それに対して、うまく遂行できる行為に対して高次レベルで同定する。その場合、抽象的で一般的な意味や目標の側面から捉える。高次レベルで捉えようとする場合は、より低次の一見多様かつ相反するような行為もよりまとまりのある (体制化された) ものとして捉えられると言う (Vallacher & Wegner, 1987)。Vallacher & Wegner (1989) は、さらに様々な行為を同定する時の思考傾向の個人差を「個人能动性レベル」(Level of Personal Agency, LPA) と呼んだ。すなわち、LPA とは、ある人が行為をどれくらい抽象的なカテゴリに体制化して捉えるかの程度と言える。

したがって、LPA の高い人は、より高次レベルの意味や目標を通して複数の役割に固有の行動パターンや自己概念を繋げ、1つの全体の一部として体制化すると考えられる。それに対して、LPA の低い人は、個々の役割に固有の自己概念しか見ない。そのため、彼らにとって自己概念は断片的で体制化され難いと考えられる。

以上に論じたことを踏まえて、LPAを自己の「体制化」傾向の指標とすることが可能ではないかと考えた。もしそうであるならば、自己の「分化」と心理的適応との関係はLPAの高低によって異なっているのではないだろうか。杜・加藤(2017)は実証研究を通して、以上の仮説を検証した。その結果、心理的適応の指標の1つである主観的幸福感(Subjective Well-Being, SWB)において、LPAとSCD_{CSD}の間に有意な交互作用が見られた。LPAの低い人では、SCDが高いほどSWBが低かった。それに対して、LPAが高い人では、SCDが高いほどSWBが高かった。これらの結果は、この仮説を支持するものと考えられる。

そして、LPAと自己概念の表象の体制化度との関係を調べるため、杜・加藤(2018)は、さらにLPAとMikulincer(1995)の自己概念の体制化度指標の合成得点(Self-Concept Organization, SCO; SCOは複数の役割での自己概念の類似性、相互効果、連動的相互作用の平均値である)との関係を検証した。その結果、有意な正の相関関係が見られた。すなわち、予想したように、LPAが高いほど、自己概念の表象の体制化度が高かった。また、このSCOの高低は、LPAと同じようなパターンで、SCD_{CSD}とSWBとの相関関係の方向を決めた。これらの結果は、杜・加藤(2017)の結果を追試・発展するものと言えよう。

杜・加藤(2017, 2018)の2つの研究の結果は、自己概念の体制化の要因を導入することによって、従来の理論上の論争や先行実証研究での結果の間の不一致をより包括的に理解できると考えられる。すなわち、自己概念の体制化度が高い人は、分化度が高いほど、より適応的であるが、体制化度が低い人では、分化度が高くても、より適応性は低くなるということである。

7. 今後の課題

今後の課題として、次の3点が少なくとも挙げられるだろう。

第1に、本研究は既に自己概念の「体制化」によって、自己概念の「分化」と心理的適応との関係の方向が異なることを明らかにした。しかし、この効果が起こる根底にあるメカニズムについては、未だ解明できていない。例えば、自己概念の体制化度と分化度の両方が高い人は、本当に仮定したように柔軟性を持ち、一貫性や統一性を感じるのか。彼らが持っているどのような特徴が心理的適応を高めるのか。今後の研究では、こうした側面を測定しこのメカニズムについて、更により深く検討し実証する必要があるだろう。そして、より包括的なモデルの提案が望まれよう。

第2に、先行研究(杜・加藤, 2017, 2018)では、既

に体制化思考傾向(Vallacher & Wegner, 1989)と自己概念の体制化度(Mikulincer, 1995)に焦点を当てたが、それらは自己概念の分化と心理的適応との関係の出方に影響する要因の(ほんの)2つでしかないだろう。他のアプローチからの検討も不可欠である。例えば、自伝的語り(self-narrative)を用いたアプローチが考えられる。McAdams(1997)によると、人は自分に関する語りを作ることを通して、過去、現在、未来、または異なる場面での自己がどのように変遷するのか、どのように相互作用するのかを理解する。そして、よく構成された一貫性がある語りは、明確な背景や意味のあるテーマを通して異なって散在している自己概念を組織化する(Reeseら, 2011)。この過程を通して、人はアイデンティティの統一感と連続感を持つことができるようになるという(McAdams, 2006)。さらに実証研究では、自伝的語りの一貫性の個人差は、幸福感を予測する(Baerger & McAdams, 1999; Waters & Fivush, 2015)。そのため、自伝的語りの一貫性は自己の体制化に影響を与えることを通して、自己の多面性と心理的適応との関係を影響する可能性があると考えられる。今後の研究では、この仮説を実証的に検証する必要があるだろう。

第3に、今までの研究では、特性レベルの多面性に焦点を当て、それと心理的適応との関係を検討していた。しかし、多重自己側面枠組み(Multiple Self-aspects Framework, MSF, McConnell, 2011)によると、自己は特性のみから構成されるのではなく、目標や情動なども様々な構成要素の一部である。そのため、特性レベルで得られた結果が他のレベルに適用できるかどうかを検討する必要もある。すでにこの点について検証を行っている研究もある(Dunlop, Walker, & Wiens, 2013; Sheldon & Emmons, 1995; Sheldon & Kasser, 1995)。例えば、Dunlopら(2013)は、特性、目標、語り(narrative)の3つのレベルで、自己の多面性と心理的適応との関係を検討している。その結果、3つのレベルでのSCD_{CSD}指標は、互いに関連していなかった($r_s = -.08-.05, ns$)。また、Bairdら(2016)の結果と同じく、特性SCDは心理的適応と相関がなかった($r = -.11, ns$)。目標SCDは心理的適応と正の相関($r = .25$)があったが、語りSCDは心理的適応と負の相関($r = -.23$)があった。これらの結果は、自己の多面性の異なるレベル(特性、目標、語り)は独立しており、心理的適応との関係が必ずしも同様ではないことを示唆している。今まで「分化」と「体制化」の両方を考慮する研究の全ては、特性レベルで行われたものである(例えば、杜・加藤, 2017, 2018; Harter & Monsour, 1992)。より包括的に自己の多面性と心理的適応との関係を検討するためにも、今後の研究では、目標や語りのレベルで先行研究の結果を追試する必要があるだろう。

〈謝辞〉

本論文の作成にあたり、九州大学加藤研究室の小林美緒氏、琴允姫氏及び他の参加者の皆様から貴重なご助言をいただきました。心より感謝を申し上げます。

引用文献

- Allport, G. W. (1937). *Personality: A psychological interpretation*. Oxford, England: Holt.
- Altrocchi, J. (1999). Individual differences in pluralism in self-structure. In J. Rowan & M. Cooper (Eds.), *The plural self: Multiplicity in everyday life* (pp. 168-182). London: Sage.
- Baerger, D. R., & McAdams, D. P. (1999). Life story coherence and its relation to psychological well-being. *Narrative Inquiry*, **9**(1), 69-96.
- Baird, B. M., Le, K., & Lucas, R. E. (2006). On the nature of intraindividual personality variability: Reliability, validity, and associations with well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**(3), 512-527.
- Bem, D. J. (1972). Self-perception theory. In B. Leonard (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. Volume 6, pp. 1-62). New York: Academic Press.
- Bem, S. L. (1975). Sex role adaptability: One consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**(4), 634-643.
- Block, J. (1961). Ego identity, role variability, and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, **25**(5), 392-397.
- Cheng, C., & Cheung, M. W. L. (2005). Cognitive processes underlying coping flexibility: Differentiation and integration. *Journal of Personality*, **73**(4), 859-886.
- Church, A. T., Alvarez, J. M., Katigbak, M. S., Mastor, K. A., Cabrera, H. F., Tanaka-Matsumi, J., et al. (2012). Self-concept consistency and short-term stability in eight cultures. *Journal of Research in Personality*, **46**(5), 556-570.
- Cooley, C. H. (1902). *Human nature and the social order*. New York: Scribner.
- Côté, S., Moskowitz, D. S., & Zuroff, D. C. (2012). Social relationships and intraindividual variability in interpersonal behavior: Correlates of interpersonal spin. *Journal of Personality and Social Psychology*, **102**(3), 646-659.
- Crockett, W. H. (1965). Cognitive complexity and impression formation. In B. A. Maher (Ed.), *Progress in Experimental Personality Research* (Vol. 2, pp. 47-90). New York: Academic Press.
- Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993). The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**(5), 834-846.
- Dunlop, W. L., Walker, L. J., & Wiens, T. K. (2013). What do we know when we know a person across contexts? Examining self-concept differentiation at the three levels of personality. *Journal of Personality*, **81**(4), 376-389.
- Erickson, T. M., Newman, M. G., & Pincus, A. L. (2009). Predicting unpredictability: Do measures of interpersonal rigidity/flexibility and distress predict intraindividual variability in social perceptions and behavior? *Journal of Personality and Social Psychology*, **97**(5), 893-912.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton Company.
- Fischer, K. W. (1980). A theory of cognitive-development: The control and construction of hierarchies of skills. *Psychological Review*, **87**(6), 477-531.
- Gergen, K. (1968). Personal consistency and the presentation of self. In C. Gordon & K. J. Gergen (Eds.), *The Self in Social Interaction* (pp. 299-308). New York: Wiley.
- Gergen, K. J. (1972, May). The healthy, happy human being wears many masks. *Psychology Today*, 31-35, 64-66.
- Goffman, E. (1959). *The presentation of self in everyday life*. Garden City, NY: Doubleday.
- Goldberg, L. R. (1981). Unconfounding situational attributions from uncertain, neutral, and ambiguous ones: A psychometric analysis of descriptions of oneself and various types of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**(3), 517-552.
- Harter, S., & Monsour, A. (1992). Developmental analysis of conflict caused by opposing attributes in the adolescent self-portrait. *Developmental Psychology*, **28**(2), 251-260.
- Harvey, O. J., & Schroder, H. M. (1963). Cognitive aspects of self and motivation. In O. J. Harvey (Ed.), *Motivation and Social Interaction* (pp. 95-133). New York: Ronald Press.
- Horney, K. (1937). *The neurotic personality of our time*. New York: WW Norton & Company.
- Horney, K. (1942). *Self-analysis*. Oxford, England: Norton.
- James, W. (1890). *The Principles of psychology*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Leary, T. (1957). *Interpersonal diagnosis of personality*. New York: Ronald Press.

- Lecky, P. (1945). *Self-consistency: A theory of personality*. New York: Island Press.
- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, **3**(1), 94-120.
- Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**(4), 663-676.
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**(6), 1349-1364.
- Markus, H., & Kunda, Z. (1986). Stability and malleability of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**(4), 858-866.
- Markus, H., & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, **38**(1), 299-337.
- McAdams, D. P. (1997). The case for unity in the (post) modern self: A modest proposal. In R. D. Ashmore & L. J. Jussim (Eds.), *Rutgers series on self and social identity, Vol. 1. Self and identity: Fundamental issues* (pp. 46-78). New York, NY, US: Oxford University Press.
- McAdams, D. P. (2006). The problem of narrative coherence. *Journal of Constructivist Psychology*, **19**(2), 109-125.
- McConnell, A. R. (2011). The multiple self-aspects framework: Self-concept representation and its implications. *Personality and Social Psychology Review*, **15**(1), 3-27.
- McConnell, A. R., & Brown, C. M. (2010). Dissonance averted: Self-concept organization moderates the effect of hypocrisy on attitude change. *Journal of Experimental Social Psychology*, **46**(2), 361-366.
- McReynolds, P., Altrocchi, J., & House, C. (2000). Self-pluralism: Assessment and relations to adjustment, life changes, and age. *Journal of Personality*, **68**(2), 347-381.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self and society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Mikulincer, M. (1995). Attachment style and the mental representation of the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**(6), 1203-1215.
- Moskowitz, D. S., & Zuroff, D. C. (2004). Flux, pulse, and spin: Dynamic additions to the personality lexicon. *Journal of Personality and Social Psychology*, **86**(6), 880-893.
- Paulhus, D. L., & Martin, C. L. (1988). Functional flexibility: A new conception of interpersonal flexibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**(1), 88-101.
- Power, M. J. (2007). The multistory self: Why the self is more than the sum of its autoparts. *Journal of Clinical Psychology*, **63**(2), 187-198.
- Reese, E., Haden, C. A., Baker-Ward, L., Bauer, P., Fivush, R., & Ornstein, P. A. (2011). Coherence of personal narratives across the lifespan: A multidimensional model and coding method. *Journal of Cognition and Development*, **12**(4), 424-462.
- Rogers, C. R. (1947). Some observations on the organization of personality. *American Psychologist*, **2**(9), 358-368.
- Sheldon, K. M., & Emmons, R. A. (1995). Comparing differentiation and integration within personal goal systems. *Personality and Individual Differences*, **18**(1), 39-46.
- Sheldon, K. M., & Kasser, T. (1995). Coherence and congruence: Two aspects of personality integration. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**(3), 531-543.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**(4), 526-537.
- Snyder, M. (1979). Self-monitoring processes. *Advances in experimental social psychology*, **12**, 85-128.
- Suszek, H. (2007). Varieties of self-multiplicity. In A. M. Columbus (Ed.), *Advances in Psychology Research* (Vol. 52, pp. 159-180). New York, United States: Nova Science Publishers Inc.
- Taylor, W. S., & Martin, M. F. (1944). Multiple personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **39**, 281-300.
- Tetlock, P. E. (1983). Accountability and complexity of thought. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**(1), 74-83.
- Thoits, P. A. (1983). Multiple identities and psychological well-being: A reformulation and test of the social-isolation hypothesis. *American Sociological Review*, **48**(2), 174-187.
- Vallacher, R. R., & Wegner, D. M. (1987). What do people think they're doing? Action identification and human behavior. *Psychological Review*, **94**(1), 3-15.
- Vallacher, R. R., & Wegner, D. M. (1989). Levels of personal agency: Individual variation in action identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**(4), 660-671.
- Waters, T. E. A., & Fivush, R. (2015). Relations between narrative coherence, identity, and psychological well-being in emerging adulthood. *Journal of personality*, **83**(4), 441-451.
- Wiggins, J. S. (1979). A psychological taxonomy of trait-descriptive terms: The interpersonal domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**(3), 395-412.

- Woike, B. A. (1994). The use of differentiation and integration processes: Empirical-studies of separate and connected ways of thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**(1), 142-150.
- Woike, B. A., & Aronoff, J. (1992). Antecedents of complex social cognitions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**(1), 97-104.
- Wyer, R. S. (1964). Assessment and correlates of cognitive differentiation and integration. *Journal of Personality*, **32**(3), 495-509.
- 安達知郎. (2009). 自己の多面性, 変動性に関する研究の現状と課題—測定方法の観点から. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, **58**(1), 209-226.
- 田島 司. (2010). 自己概念の多面性と精神的健康との関係—女子大学生を対象とした調査—. *心理学研究*, **81**(5), 523-528.
- 杜健・加藤和生. (2017). 自己概念は分化しているほど心理的に適応しているのか: 個人能動性レベルからの再検討. (投稿中)
- 杜健・加藤和生. (2018). 自己概念は分化しているほど心理的に適応しているのか: 自己概念の表象の体制化からの実証的分析. (未発表データ)